一里塚の清掃（7月24日）

有松ゆかたまつり・国際芸術祭あいち2022の開催を控え、清掃が有松まちづくりの会やあないびとの会の皆さん15名程で行われました。市松模様に置かれた敷石がくっきりと現れるなど、1時間ほどの作業で見違えるようになりました。ご苦労様！

参加者の皆さんとの記念撮影

山車会館での神功皇后車展示　10月2日まで

名古屋型の特徴を備え、装飾が少なく全体に黒漆、金箔で飾られている。高欄金具の梅鉢紋の意匠や渡辺小華下絵の水引幕など見どころ満載である。

からくり人形は当初関羽と２体の唐子。日清戦争の大勝により、神功皇后と武内宿禰に置き換えられた。日本書紀の鮎釣りで吉凶を占った故事による。

山車会館での神功皇后車の展示はあと１か月。２階には当初の人形の一部が展示されている。より多くの方に間近に見ていただきたい。

神功皇后と鮎釣り

国際芸術祭で賑わう有松東海道（7月24日）

開幕を1週間後に控えたこの日、準備の様子を見てまわりました。旧山田薬局には案内所の看板が設置され、国際芸術祭への雰囲気を盛り上げていました。芸術祭への関心を寄せる人も少なくないようで、一部が屋外展示されている作品を鑑賞する姿も見られました。

”プレスリリース”によると、有松の展示では「この地で継承されてきた伝統的な手仕事に対して、先住民文化を含む世界各地の多様な文化圏で受け継がれる手工芸などに着目し、対話を試みる」とのこと。

右写真は、屋外展示されているミット・ジャイインの作品。タイの少数民族出身。中濱家住宅始め８か所で展示される予定です。すでに数か所で作品が掲げられて、「伝統的な日本家屋の建築空間に応答しながら」物語を語っています。

旧山田薬局

「水主(みづち)」
竹田家住宅前

ミット・ジャイインの作品

国際芸術祭あいち2022　（7月30日）

有松地区ウエルカムレセプション

竹田家住宅の蔵庭で、コンソーシアム有松主催の"歓迎の集い"が行われました。

大村愛知県知事、片岡真美芸術監督など国際芸術祭あいち2022に関わる皆さんが、開催地有松の皆さん、SHIBORIクリエーターの皆さんが集うことで、これから始まるアートな75日の幕開けを祝いました。当初予定を大幅に上回る80人程が参加されていました。

琴の演奏を聞きながら懇談する皆さん

有松ゆかたまつり（7月30日31日）

昨年に続き「有松を元気に」との思いを込めて行われ、有松の夏の風物詩になりつつあります。連日の猛暑をものともせず来訪者の多くが浴衣姿でした。暑さを和らげようと小・中学生も参加して打ち水がされていましたが、効果のほどは・・

打ち水

今年は”有松まちあるきスタンプラリー”が大人気。スタンプを6か所で押すと右の広重浮世絵ができあがり。しかも完成品を絞会館に持っていくと絞りタオルがもらえるとのこと。この記念品は先着800名に渡される予定。あないびとの会の町並みツアーでは、スタンプ置き場の案内もされていたようです。

山本寛斎×竹田耕三

浴衣展示

山車会館では故竹田耕三氏と故山本寛斎氏がコラボした舞台衣装が展示されていました。中町年行司では文嶺講の授与品頒布。祇園寺では絞り染めの体験会が行われ、水洗いでの色の変化に驚いていました。

かき氷

絞り体験

有松文嶺講

屋外展示も行われ、“足助たんころりん”と”「絞」「瓦」灯りストリート”が設置されていました。夕方には点灯されました。

足助たんころりん

町並み散策を楽しむ人々

張正、テレビ愛知で放映（7月25日）

「世界！ニッポンに行きたい人応援団」という番組で、アルゼンチンで浴衣づくりをしているレダさんが日本で染物を学ぶ様子が紹介されていました。学ぶ場の一つとして張正が選ばれ、雪花絞りの制作体験が放映されました。①生地を縦に蛇腹折りし、生地全体を三角形に蛇腹折りし、次に②板で挟んで染める。③水洗いしてできあがり。鵜飼敬一・小百合ご夫婦の丁寧な教えがレダさんのやる気を引き出しているようです。帰国後、以前のプリント柄から雪花絞りなどの生地を自作して浴衣制作を行うようになりました。

なお、張正は平成７年に雪花絞りを浴衣として制作しはじめ、平成21年に某ビールメーカーのCMをきっかけに配色もカラフルにすることで広く知られるようになりました。

有松小学校で花火打ち上げ（7月30日）

有松小学校PTA主催で花火大会が行われました。PTA会長の山上正晃さんは、「夏休みに入った子供たちに花火を見せてあげたいという親の思いから実施することにしました。今年は更に、”有松ゆかたまつり”や”国際芸術祭”が有松で行われます。皆でそれらの開催を祝いたいと思い、初日の7月30日に打ち上げることにしました」と、おっしゃっていました。

花火は夏に欠かせぬ風物詩。江戸時代に観賞用として各地に広まりました。そもそもは疫病流行などによる死者の霊を慰め悪疫退散を願ってのものでした。コロナ感染第7派が拡大する中、ありがたいものです。

ところで、江戸時代は花火の色は赤色のみだったそうです。

Hisaya Arimatsu Art Passage（7月1日～8月21日）

久屋大通公園内の空を、夏の強い日差しを受けて鮮やかな染め物が舞っていました。今回展示を手掛けたのは"スズサン"の村瀬弘行さんと"まり木綿"の伊藤木綿さん村口実梨さん。村瀬さんは客員教授を務める名古屋芸術大学の学生さんと制作。伝統を身近に感じてもらいたいと・・藍色の反物は清涼感と安らぎをもたらしていました。まり木綿はZONE2のガーデンが印象的であったことを受けて、開花をテーマに絞りの柄を花びらにイメージして制作。風に揺らぐ色鮮やかな空間を演出していました。

絞り実演･町並みガイド 頑張る！

第7派到来そして連日の暑さも加わり、有松を訪れる観光客はなかなか厳しい状況です。そんな中、土日祝日限定ですが、絞会館では伝統工芸士の実演が続けられています。あないびとの会による無料町並みツアーも絞会館受付で行われています。"有松の魅力を伝えたい""国際芸術祭をもりあげよう”との想いで・・・

近代のアリマツ②　「有松にガス灯ともる」

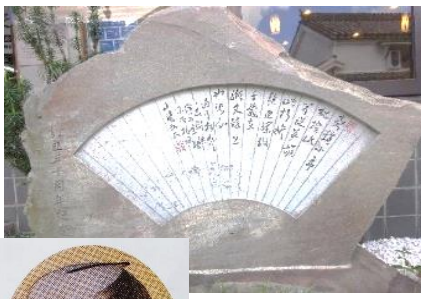
竹田邸のガス灯

竹田邸や安藤邸の玄関屋根にガス灯(今は電灯)があります。いつ頃使われていたのかご存じでしょうか。

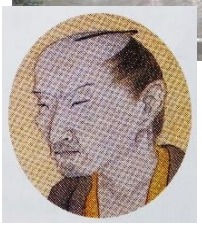
東邦瓦斯の社史によると、明治44年(1911)9月有松町・大高町をガス供給区域に編入。大正10年(1921)8月鳴海町・有松町へのガス供給廃止とあります。新しい時代の象徴であるガス灯が有松の地にともったのは、明治から大正に移る頃です。また同じ頃、愛知電気鉄道(後の名古屋鉄道)により電灯もともるようになりました。

大正時代の初めはガスと電気の競合時代で、停電時の予備灯としてガス灯は使われることが多かったようです。やがて、灯用は電気、熱用はガスと使い分けされるようになったそうです。せっかく御器所から引いたガスも、第1次世界大戦に伴う石炭価格の高騰による採算悪化で、大正10年に廃止されました。ガス灯の時代は、思いのほか短かったようです。

有松と美　②　　頼山陽と服部家



絞会館前の歌碑



頼山陽

文化10年(1813)11月山陽34歳10月、美濃、尾張へ揮毫旅行。

大垣、郡上、上有知(こうずち)、名古屋、大垣を経て桑名から七里の渡しで熱田に上陸。山陽は尾張藩医小林香雪(こばやしこうせつ)に出迎えられ、有松村井桁屋を訪問する。井桁屋に宿泊した時の詩歌『有松邨ヲ過ル』を扇面に書き記した。

京で面識のあった服部家４代目の歓待を受けた。有松は大火(1784年)後復興していた。山陽は江戸の街にも劣らない立派な町家が連なる有松を見た。

京の蒔絵師５代山本春正(1735～1803)が1789年に名古屋に移住。妻は「いわ」(有松服部孫兵衛家２代目の妹)。山陽は京の蒔絵師６代目山本春正(1774～1831)と交友。６代目山本春正の弟春章が井桁屋の養子で４代服部孫兵衛。６代目山本春正と母いわの紹介で井桁屋に泊まる。

山陽の三大著述「日本外史」二十二巻、「日本政記」十六巻、「通議」三巻。

「日本外史」は松平楽翁(元老中松平定信)が感動。自ら題言を巻頭に記す。「日本外史」は吉田松陰、橋本佐内、梅田雲浜、近藤勇の愛読書。「日本政記」は伊藤博文の愛読書。

(『有松邨ヲ過ル』の詩歌とその意味は、「かわら版138号」に記載。)

催事･行事の予定

現在、絞り会館2階の実演は毎日実施(コロナの状況によっては変更あり)

9月3日～10月2日　17:00~21:00「絞」「瓦」灯りストーリート NPOコンソーシアム有松
9月12日(月)　18:00　有松町並み相談会　コミセン　　↑※各種体験プランあり
9月24日(土)　10:00　蒔絵ワークショップ　NPOあいちヘリテージ協議会(川村家西蔵)
9月24日(土)　14:00　有松町家ライブ「古楽器フルート・ピアノ」　棚橋邸　同実行委員会
9月25日(日)　7:30　かえで道清掃　有松まちづくりの会
9月26日(月)　18:00　有松まちづくりの会役員会　コミセン

発行者　竹田嘉兵衛（有松まちづくりの会　会長）
編集者　加藤　明美（有松まちづくりの会　広報部長）
pegasusb@mc.ccnw.ne.jp

有松まちづくりの会は、ホームページを公開しています。

国際芸術祭あいち2022　展示作品紹介

● 竹田家住宅：プリンツ・ゴラーム

部屋の壁や欄間には奇妙な顔の仮面がいくつも掛けられています。

仮面は古代から、宗教的な儀式や祭礼のほか演劇や舞踏会、呪術的な目的などで用いられ、その人物の人格を変化させたり、匿名的な存在にさせたりしてきました。コロナ禍以降の世界では、仮面＝マスクが使用されています。この状況を深く考えることを促します。

《見られている》

● 竹田家茶室：ガブリエル・オロスコ

東アジアで広く使われる長さの単位”尺”に触発された作品。”尺”は人間が人差し指と親指を広げた長さなどと言われます。

床の間や壁には古布を使って制作した掛け軸が展示されています。古布が円形や目形に切り取られています。円形が回転を始め、相互に関係性を生み出し、無限の繋がりや変化を暗示します。

《ロト・シャク(回転する尺)》《オビ・スクロール》

● 岡家住宅：ユキ・キハラ

サモアの伝統的テキスタイルである"シアポ"に、現代のサモアが直面する文化、環境、社会経済の諸問題が描かれ、表面に手作業で繊細なビーズ装飾が施されています。この《サーモアのうた》は、複数の職人とキハラ自身の家族の手による制作過程においても、サモアに根差す共同社会のあり方が窺えます。シアポと振袖の文化的特色の融合は、日本人の父とサモア人の母をもつユキ・キハラのアイデンティティを物語っています。

《サーモアのうた》

● 岡家住宅：AKI INOMATA

AKI INOMATAは、人間以外の生きものと「共同で制作」した作品で知られています。絞り染めの技術とミノムシが巣をつくる技術の混淆を久野染工の協力で実現しました。左の映像作品では、美しい絞りの蓑をまといながら葉を食べるミノムシが、右の天窓の空間には、絞りで蓑をつくったミノムシが小枝に付いて展示されています。

右上は羽化した後のミノガの翅はねを絞り染めで団扇に仕上げたものです。

《彼女に布をわたしてみる》

国際芸術祭あいち2022　展示作品紹介

●　株式会社張正：イワニ・スケース

約1000個のガラス玉が吊られています。その中を通り抜けながら、傷ついた土地と人々の記憶に思いを馳せてみます。スケースは、豪州先住民族アボリジニーに出自をもち、植民地政策のもとで長らく被ってきた影響を作品で扱っています。1950年代の核実験による死傷者や居住者の強制移住、環境破壊を忘れるなと・・ガラスは先住民の主食ヤム芋の形をしています。　《霧箱》⇒

●　川村家住宅蔵:タニヤ･ルキン･リンクレイター

アラスカ先住民族にルーツをもつアーティストで、先住民の暮らし、土地、生計の歴史を主軸に置いた作品を発表しています。ルキン・リンクレイターによる映像・スカーフ・石による空間。蔵という重要物保管の空間の中で、先住民族に伝わる大切な品々が有松の地で息を吹き返している。蔵の中で大きな存在は「先住民の祖母たち」が身に着けてきたスカーフによる彫刻。それとの関連で愛知県内で採取された石が置かれている。会期後元の川に返される。

《グラスグラスグラス》

●　旧加藤呉服店：イー・イラン

イー・イランは、東南アジアの歴史を題材に植民地主義権力、歴史の記憶などが現代社会に与える影響に言及する作品を制作。この作品では、通常は床に敷かれる編まれたマットが天井から舞うように展示されています。眼差しの高低差は統治者と被治者を象徴します。マットは床に敷かれることで水平で民主主義的な態度を示唆します。

イーは伝統的なティカなどから着想を得て、地域間の架け橋となって偏見に満ちた地政学的な風景を超えたいと願っているようです。

《ティカ･レーベン(マットのリボン)》

●　旧加藤呉服店：宮田　明日鹿

宮田は、この会場で開幕のひと月半前に「有松手芸部」を立ち上げました。「手芸部」は、地域の人々や来場者とともに、編み物とお喋りを通じて新たなコミュニティを作ります。集まった人々がそれぞれの編む知識や手芸にまつわるストーリーを持ち寄って、「人生を編む」ことを互いに学びあう場が創出されます。戦前戦後の激動の時代を生き抜いてきた年長者の知恵を、世代を超えて共有する場になるでしょう。

「手芸部」の皆さんの作品

参考：展示会場の「作品解説」